

写真1～3 台木の異なる17年生「前川次郎」の収穫の様子



1 「静力台1号」台樹

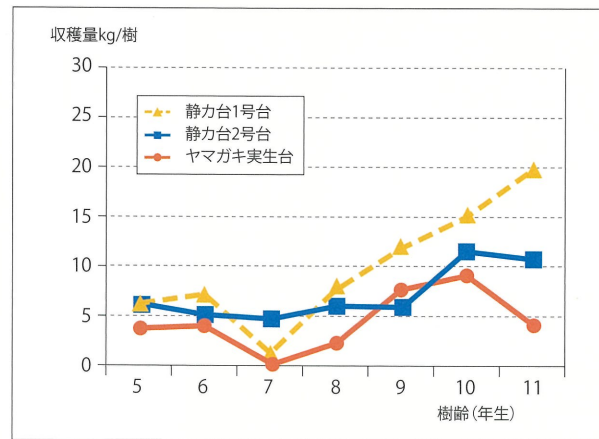


2 「静力台2号」台樹



3 ヤマガキ実生台樹

図2 台木の異なる「前川次郎」樹における収穫量の推移



**4 静力台1号と静力台2号を台木とした「前川次郎」の収量と果実品質**

初結実させた5年生以降の「静力台1号」台樹と「静力台2号」台樹の収量は、いずれも樹体が小さいにもかかわらず、ヤマガキ実生台を上回って推移しており、早期成園化に適していると思われました。特に「静力台2号」台樹は、初結実させた5年生以降、収量が安定しており、収量の多い年と少ない年が交互に現れる隔年結果の抑制が可能と考えられました(図2)。

ほぼ成木化した17～19年生時の一樹当たり収量はヤマガキ実生台樹に及ばないものの、樹冠占有面積当

表2 台木が「前川次郎」の収量に及ぼす影響(2013～2015年)

台木	3年平均収量 <sup>z</sup> (kg/樹/年)	樹冠占有面積当たり平均収量(kg/m <sup>2</sup> )	樹容積当たり平均収量(kg/m <sup>3</sup> )	樹容積当たり平均収果数 <sup>y</sup> (個/m <sup>3</sup> )
静力台1号	31.4(79) <sup>x</sup>	3.66(119)	1.80(144)	7.3(141)
静力台2号	16.6(42)	4.03(132)	2.11(169)	10.1(195)
ヤマガキ実生	39.7(100)	3.06(100)	1.25(100)	5.2(100)

z: 17年生～19年生(2013～2015年)までの平均収量  
 y: 17年生～19年生(2013～2015年)までの平均収果数  
 x: ヤマガキ実生を100とした場合の比率

たりや、樹容積当たりの収穫量は、ヤマガキ実生台樹を上回っています(表2)。

このことから、これらのわい性台木品種を台木とした場合は、樹勢に応じて密植することにより、多収が期待できます。

**5 今後の展開**

現在、県内の一部地域で、これらを台木とした苗木の販売を開始していますが、今後は販売範囲を広げよう、関係機関と調整することも、効率的な苗木生産のため、育苗業者への技術支援を行います。

(原著論文名: カキわい性台木新品种「静力台1号」及び「静力台2号」の育成とその特性 服部憲明ら(2015))  
 (論文掲載雑誌名: 静岡農技術研究報 8・61-67)

(掲載ホームページ名: 静岡県公式ホームページ(ふじのくに)・産業・雇用・果樹研究センター・新しい技術・平成28年度・カキの低樹高栽培が可能わい性台木「静力台1号」「静力台2号」  
<http://www.kajuken-shizuoka.jp/an/628.pdf>  
 連絡先: 果樹研究センター果樹加工技術科  
 TEL 054-376-6155  
 Mail kajju-kenkyu@pref.shizuoka.lg.jp

**農林技術研究所だより**



最新研究紹介



果樹研究センター 果樹加工技術科長 荒木 勇二

カキわい性台木「静力台1号」と「静力台2号」の特性

**1 はじめに**

カキは樹高が高くなりやすく、摘果や収穫せん定等の管理作業に脚立を用いた高所での作業を強いられ、労働生産性が低く、農作業事故の危険が伴います。

特に近年は生産者の高齢化に伴い、作業への負担が大きくなってきています。

そこで、農林技術研究所果樹研究センターでは、これらのカキ樹の特性に伴う問題点の解消を図るため、わい性台木である「静力台1号」及び「静力台2号」を育成したので、紹介します。

**2 育成の経過**

1988年に、柑橘試験場落葉果樹分場(現果樹研究センター都田ほ場・浜松市北区都田町内)に植栽されたヤマガキ実生台「前川次郎」59本の中から、樹の大きさや収量等のデータに基づき、樹高が低く、収量性が高いと思われる樹を数個体選び、台木の枝(ひこばえ)を発生させ、台木由来個体を組織培養により増殖・発根させた後、これらを台木とした「前川次郎」の苗木を育成しました。これらを元に2次選抜試験を実施し、わい化程度の異なる2系統を選抜し、2014年3月6日付けで品種登録となりました。

**3 「静力台1号」と「静力台2号」を「前川次郎」の台木とした場合の樹体生育**

これらのカキ台木品種は、前述のとおり穂木品種として「前川次郎」を接いだ樹を元へに選抜しました。

以下は主に2次選抜試験における3年生から11年生樹までのデータ及び17年生から19年生樹のデータを元に記述します。

幼木時から「静力台1号」台樹と「静力台2号」台樹の樹高の伸びは市販苗木のヤマガキ実生台樹と比較して緩やかで(図1)、19年生樹においても、いずれも樹高はヤマガキ実生台樹よりも低く、「静力台1号」台樹がヤマガキ実生台樹の約80%、「静力台2号」台樹が

図1 台木の異なる「前川次郎」樹における樹高の推移

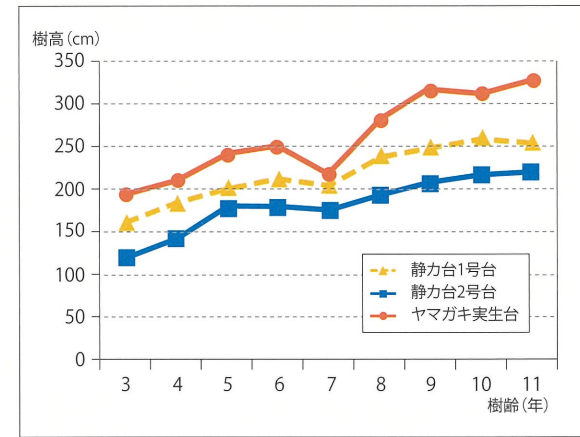


表1 台木が19年生「前川次郎」の生育に及ぼす影響(2015年)

台木	樹高(cm)	樹幅(cm)	樹冠占有面積(m <sup>2</sup> )	樹容積(m <sup>3</sup> )
静力台1号	235(81) <sup>z</sup>	308(76)	7.6(59)	15.5(49)
静力台2号	215(74)	230(57)	4.2(32)	7.8(25)
ヤマガキ台	292(100)	405(100)	12.9(100)	31.7(100)

z: ヤマガキ実生を100とした場合の比率

75%程度に抑えられました。また、樹容積では、「静力台1号」台樹がヤマガキ実生台樹の約50%、「静力台2号」台樹が25%程度に抑えられました(表1、写真1～3)。

このように、「静力台1号」を台木とした場合はややわい性となり、「静力台2号」を台木とした場合はわい性となります。